

94

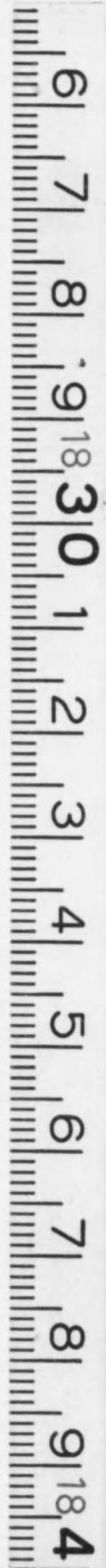
特246

849

思想研究所調査

印度獨立運動の展望

國際思想研究所



始



特246
849



印度獨立運動の展望

目次



印度獨立運動の展望

國際思想研究所

今や世界大轉換史を創りつゝある最中に、ビルマは遂に獨立の一大巨歩を踏み出し、ヒリッピン亦近く建國の壯途に就かんとしつゝある大東亞の黎明期に於て獨り印度四億の民衆は之れを如何に觀望するや。吾等はガンヂーの無抵抗主義より十人一殺百人一殺主義を以て總蹶起を促し米英人は一人残さず叩き潰すか逐ひ拂ふことを再三強調して來たのであるが、果然チャンドラ・ボース氏は遂に起つて武力抗爭のため日夜東奔西走されてゐる。本篇は素より印度に與ふるの書ではないが、今こそ大印度の人達は千載一遇の好機を逸することなく祖國の爲め血を以て獨立を闘ひ取ることを吾等日本人は祈念して已まない。

印度四億民衆獨立解放の使命を擔ふて來朝せるシユバス・チャンドラ・ボース氏は武力倒英の方法による獨立宣言を發表するや挺身昭南に飛翔して印度獨立聯盟會長の任に就くと共に新に印度國民軍總統の重責をも帶して國民軍精銳を率ゐる果敢な闘争へと第一歩を踏み出した。

縷々詳述する迄もなく彼の國民會議派の印度獨立獲得史に見る業績は前衛ブロックの構成とこれが指導に當つてその方法を指標した事で、これにみる彼の特徴は觀念的よりも實踐的且つ綜合的であつて、従つて印度獨立獲得使命達成の方法は極めて具體的であることである。

昨夏來有力指導者を英國に監禁されて反英運動は印度國民に一抹不安の影を投げてゐたが、今日この時代的な指導者を迎ふるに及び如何に前途に光明と歡喜を招來したかは察する迄もなく、亦、その獨立運動が彼によつて如何なる轉換を示すかは刮目すべき事象である。

これは曩に東條首相の帝國議會壇上よりする二回に互る印度獨立運動支援の決意表明に呼應し好機到來と立上つたのであるが、客觀的にかゝる情勢を招來したのは言ふ迄もなく皇軍作戰の果敢な進展と戦果收拾が成功した所に起因するので、シンガポール陥落以後蘭領印度の攻略成つて、皇國海軍の印度進出が容易になると共に作戰が積極化して英印の連絡を危殆に導いたことに始まり、一方、ビルマが全面的にその領土より英勢力を驅逐し、同じ日本の支援に依り獨立を迎へることになつた現實が印度の指導者達の進む可き大方向を明示したに違ひないのである。此處に英國の強權彈壓の態度が印度と鋭角的な對立を持つて脅威と不安の前に曝された譯で正に危機到來の姿である。

従つて、吾々は此處で一應最近の印度情勢を現實的に顧み認識を確固にすると共に印度獨立達成の前途に障害たる可き諸要素をも検討しもつて參考としたいのであるが先づ概觀的にクリップス退印後の印度動向の大要を知るならば、この獨立運動の中樞

勢力たる國民會議黨の過半の黨員は現實の時局に無批判に從來の如く對英協力によつて對日武力方針を採用するものとは考へられないのが大勢である。この事は、曾て國民會議黨委員會が、印度に在る英國軍の反樞軸抗戰に對する非協力態度を方針に採擇した事實に照合しても解るし次いで、日本軍の印度侵入を誘發するものは在印英國軍の駐在である原因を指摘した點でも瞭かである。併し乍ら、この對英非協力的態度乃至、英政治力の全面的驅逐への動向が直ちに對日好意の反映かと言へば強ち然りと云ひ得ないのであつて未だ情勢に微妙なものを残してゐるのである。而して、この情勢を吾に有利に誘導するものは今後我方の作戰の有利な展開が國際情勢に及ぼす影響と、吾々の獨立運動支援態度に漲る熱意と努力が如何にその變化に結び付くか、要訣であらねばならない。

この事から吾々は、對印認識に於て通常稱へらるゝ如き英國の搾取に喘ぐ悲境に虐げられたる印度などの概念的な觀察も却け、人種、歴史、社會、政治の實狀が作る情

勢を摘要的にも現實に即して認識しなければならぬのである。

人種に就いて言つてみればドラヴィンデアン系諸種族は印度半島の南部及び東部の英領印度に居住し歴史的に土着の被征服民族として前述の概念に適應するが、西北地方或は印度半島の奥地に居住する土侯諸國の民族はインドアーリアン系諸族で所謂征服民族であり皮膚の色も前者の黒色に對し遙かに白人種に近いのである。殊に土侯の多くは富豪として贅澤な生活を送り被壓迫民族階級の唱ふる鬭争問題には概して埒外に立ち、且つ、從來印度内政問題の癥として必ず取上げられる印回兩教對立抗爭もこの地域には比較的少くして土侯の多くは對英協力方針のもとに安全地帯を構成してゐるが如き感があるのである。勿論時局の影響が彼等の専制政治の持續性に變化を招來しないと限らないが併しその傳統性が今遽かに動搖するとは考へられないのである。

この印回兩教對立抗爭の問題は印度國內問題として宗教分野に於て銳角的な對立抗相を呈して來てゐるのであるがこの相剋を全印的な社會問題として取上げる前に、單

に印度教徒社會内部を覗くと其處には所謂四階級制度の生ずる派閥的な確執割據の狀態が撤廢されず、爲に純一鞏固な團結力を發揮し得なかつた所に從來の獨立運動に缺陷があつたことも認めなければならぬのである。而して、この國民會議黨の指導方針が、獨立獲得の目的に於て不變であつても、常に一定の方向に維持されて來たかと言へば必ずしもさうでなく、單に獨立問題が國內問題として取上げ得らるゝ状態にあつた場合はこれに没頭し得ても、一旦國際情勢の變動が激しく不安を傳へるとき、まづこの運動と結託してゐる地元印度資本家達の目的、即ちこの運動の助成によつて英國資本を印度より驅逐せんとする態度に變化を生じ、これが指導部そのものに反映し運動に現はれて來るのである。従つて今次歐羅巴大戰勃發以來の會議黨の抗英指導方針も穩健派が左翼派と提携して右翼派を壓迫するかと思へば、資本家の御機嫌を伺ふて左翼派の意志を無視するが如き處置に出で、みたり、或は又、時に非暴力不服從運動を採擇するかとみれば、次には義勇軍の編成に依つて武力抗英を企畫するかの如く見

せ、これが又再轉して不服從運動に戻る等變轉極り無く且つ都度指導部の顔觸れも變るのである。

併し乍ら、印度獨立運動と謂はるゝものは一にこの國民會議派の運動を指すのであつて、印度に於けるこの派の地位は壓倒的であり、英領印度内に於ける過半は勢力範圍にあつて、その動向が常に世界注視の的である點は周知の事實であるし、且つ前述の如く大東亞戰勃發と共に皇軍作戰による迅速果敢な成果收拾の影響が、指導部の認識を是正し、その上多數が對英非協力に傾き印度人の印度確立の方向に進みつゝあるのであつて、中に、ネール一派の如く印度國內に他國勢力の有利な情勢の進展を拒むとする者もあり、又、中央指導部の意嚮を無視する向きの者もあつて鞏固な結束のものと同一歩調に進むとは言へないものゝ大勢に於てその方向を指してゐるのは事實と言はねばならぬ。

更に此處で印度教徒と對立する回教徒社會の動向を検討するに、これが印度史上の

流れに在つて印度教との關係に於ける現實の根本的な對立性を見ると、時に國際情勢の變轉に對處して印度教徒派と相提携協力して行動を一にするかと言へば些か疑問である。即ち、印度教時代の久しきに亙る覇業を覆へし天下を奪つたのは回教徒であり、彼等は征服者として五百年の間、極力印度教の彈壓に終始するの立場を維持した。これが英國勢力の進出に遭ふや覇業の顛覆を餘儀なくされ、代つて印度教が英國勢力に結び付き、その庇護を受け且つ利用すると共に百有餘年に亙り教養的にも經濟的にも回教徒社會を引離し甚だしき懸隔を招來したのであつて、回教徒としては往時の黃金時代の回顧に萌す矜持と意地と更には彼等印度教徒の強壓を怖れて容易に接近せざるのみか寧ろ自己保衛の意味から回教徒のみの國家樹立を畫してゐるのである。即ち印回對立の面に於ては會議黨の印度獨立運動の目的が全印的にあるに反し、回教徒の場合は回教徒地域に於ける地歩の確立を目指すのが第一義である。

この回教徒の勢力は會議黨と等しく英領印度内に蟠踞し、それが親英的な諸士侯勢

力と反對の會議黨の中間に介在し乍ら、前述の目的達成のために英國勢力を利用する場合が多いので親英的色彩に濃いとされてゐる。尤も、飽迄もそれは利用に過ぎないことは一旦それが自己防衛の立場から利害關係に反する場合抗英措置に出ること屢々あつて、例へば最近のクリップス訪印の節には彼と會議派委員との間にボスの取引の行はるゝことを警戒して示威運動を試みたるが如く、又、英國側の提唱に係る全印舉國戰線に参加を拒否する等飽迄も自己保全の立場を捨てないのである。

又これとは別に殆んど絶對的に現状維持を支持するものに前述の諸士侯があつて、彼等はその專制政治權の喪失を極度に恐れる立場から對英協力を唯一の條件とし、會議派の如何なる働きかけも功を奏しなかつたので、若干の例外の士侯を除いては英國勢力の重要據點として最後迄抵抗に出るものと考へらるゝのである。

併し乍ら現實的に且つ全面的英國の對印依存状態を檢討する時、果して印度が往時の如く英國の生命線的な資源國として英國經濟の基地たる役割を現在も果してゐるか

と言へば、それは、幾多變遷する歴史の過程の裡に立つて著しい變貌を呈し來り今日に於ては必ずしも英國にとつて重要な存在とはなつてゐないのである。その理由として挙げらるゝものは、國民會議黨と印度地元資本家の提携による自主的な諸産業の發達の状態が可成りの程度迄輸出を見る現状であつて英國人の經濟活動の舞臺としての印度は前途に對する希望が頗る稀薄となつて來てゐるのである。これを統計が示す如實の數字に讀んでも解るので、一九三六年の英國の對外投資總額に在つて英印經濟關係に於けるものは一割四分強であり輸出にあつて七分、輸入六分が實狀とされてゐる。而かも漸次これが遞減を示すとすれば英印經濟關係の將來性を卜するに容易であると言はねばならない。且つこのことは印度經濟が自主的立場を採りつゝあるを證するもので同時に大東亞的性格への覺醒と思はるゝのである。

次いで今次大戰の勃發を見るや英國は本土防衛の抗戰資料の大部を印度に仰ぎ、又西亞守備の兵力も印度兵をもつてこれに充當してゐたが、國際情勢の變化から殊にフ

ランスの敗北が英國の頭上に直接危機到來するに及び、更に船舶その他の條件に制肘を受くるに至つてこの抗戰資料獲得の地を印度より大西洋沿岸諸國に換へ、且つ、東亞情勢に對處す可く西亞に印度兵と交替に英兵を送る等對印關係に變化を見るに至つたのである。

その上、英本土防衛措置に繁忙を極むる當局の關心は印度洋沿岸の防備強化に充分向けられず、その方面の防備は一に英領各地に於ける軍需工業を勃興させこれを獎勵指導することによつて必要な武器を供給に俟つ方針を採用しその中心地を印度に置いたのである。この關係からして印度洋沿岸に於ける英領各地の軍需工業は股脈を極めこれが現在のみならず、將來に於て自主的な印度經濟の確固たる基礎となることは疑ひの無いことである。

以上述べた如き情勢裡に於て然らば英國は戰爭遂行の立場に於てその段階毎に獨立運動に對し如何なる措置を採つたかと言へば、先づ獨立運動の分裂を策し總督行政參

事會なるもの、組織を擴大し、會員及び省長官數の大部分を印度人に割當て、更に會議黨に對しては印度教徒社會内部の被壓迫階級、或は印度教徒以外のシイク黨からこれが任命を行ひ政治的基礎を表面的には固めたのである。併しこれに依つて英國の危機は打開せられず更に悪化の一途を辿る許りなので現在ではウェーベルを印度總督に任じ武斷一點張りの強壓政策を採らうとしてゐる。これは從來の英國の對印懷柔策の一切が失敗に歸し最後の手段を採らざるを得なくなつた苦惱をその儘表現したものと言はねばならない。又、如何にもしてこの獨立運動を阻止すること不可能と知つて最後の觀念を決めた場合、一時印度を放棄しこれに完全獨立を賦與すると共に、代償にこれを驅つて對日共同戦線に立たしむるに非ずやとする考へもあるが、併し指導者がこれを飽迄も英國の術策であるとする認識に缺くる所無き限り大きな疑問符と思はるゝ。且つ、今回のシユバス・チャンドラ・ボース氏の武力獨立獲得の確信を披瀝した言辭の中にも、若し、印度が此機を逸して英國との惡縁を戦後に迄持越すとすれば、現

在米國のためその領土を侵蝕されてる英國として更に苛烈な擄取を印度に求むるに違ひないとする認識からも起上つたのであると指摘してゐるのである。而も斯うした見解は國民會議派の主流の一の青年に依つて代表さるゝ、實力行使派の今日迄の努力が酬いられて、現在では知識階級及び青年層の思想である許りで無く、印度農民並に勞働者階級の間に支持さるゝとすれば略ぼ見透しがつくと云ふもので、而もこの武力に依る抗英闘争はこの自覺と盛上る青年層の熱とを背景に持つだけに極めて尖銳的な展開をみるに違ひないのである。

次ぎにこの獨立問題に關聯して我々の重大關心を奪ふものにアメリカの頻りなる對印進出の畫策がある。從來印度一般大衆の對米感情は、アメリカが對印態度に於て印度獨立運動に興味と同情を寄せ、曾て獨立運動の亡命客に好意を示した等に起因して頗る良好であつた所からその進出を容易ならしむる素地がある譯である。併しこれは飽迄も擬裝であつて、アメリカの主義綱領から言つて眞意は飽迄も自國の利益本位で

あることは贅言を要しない所である。

即ち、今日米國が印度に依存する物資の供給が大戦の影響から不圓滑に置かる、ため、アメリカ産業界の状態に不安を招來するので、この資料の獲得を目指すこと、一方、英國勢力の退潮の機会を捉へてその権利を替つて繼承する建前から對印進出を企畫してゐることは間違ひない事實である。

従つて現在は武器貸與法を印度にも適用することに依つて印度各地に軍需工業を起し、これら各地の民衆に經濟的恩澤を振撒いてゐるのであるが、この貸與なるものが將來に於て如何に苛烈な代償の請求に變るかは遙かに想像を越ゆるものがあると思はれるのである。チャンドラ・ボース氏も斯る米國の欺瞞的態度の本態を衝いて、これはアメリカ主義と人道主義の假面に覆はれた世界制覇の野望であると憤激の念を發してゐるが、吾々も、印度一般民衆の對米認識の是正に於て一日も速かなる可きを冀ふのである。

以上の諸動向とは別に更に英國の對印戦争遂行を阻害する暗礁としてもつと普遍的な食糧饑饉といふ極めて痛切な問題が英當局を悩ますに至つた。これは言ふ迄も無くビルマの獨立によつて印度の對ビルマ依存性に重大な訂正を餘儀なくされたことに起因するので、従來、ビルマの輸出量の過半は印度に向けられ印度の主食糧の米と印度工業資料の大部を供給し來つたのであるが、昨年來これが杜絶を見るや、印度重要工業地帯に一大恐慌を招來する一方、食糧饑饉を繞つて各地に暴動頻發する有様で而もこれが益々深刻な様相を辿るものとされてゐるのである。

如上の情勢を總體的に展望し全印的な立場に於て捉へるとき、こゝに結論さるゝものは、この獨立運動が幾多の變轉を辿ると雖も最早や印度は政經兩面に於て一個の生成體として英國の羈絆を離脱する機会に到達した事を語るものと言はねばならない。従つて今次のチャンドラ・ボース氏に率ゐらるゝ對英武力抗争への具體的な發足は前途に幾多障害の累積を見ると雖も従來の運動に比して極めて飛躍的な効果を伴ふもの

438
205

であることを信ずるのである。

昭和十八年九月三日印刷
昭和十八年九月七日發行

(非賣)

著者
行人

水島

齊

印刷人

東京都麻布區筆筒町六七
糸川東洋男

印刷所

東京都芝區三田四國町二ノ二五
嘉屋印刷所

發行所

東京都澁橋區柏木一ノ四八
國際思想研究所
電話澁橋(37)一七二〇番
振替東京三三〇一一番

終

